ノエル

ぴーと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ノエル

【Ｎコード】
Ｎ８６６３Ｙ

【作者名】
ぴーと

【あらすじ】
クリスマスイブの朝。夢見の悪いアルマさん。ベッドを壊してしまいます。藍羽邸に一日格闘訓練にお出かけ。休憩時間には、ルリさんとティータイム。しかし悪石が現れて……。鬼瓦も登場します。

（前書き）

捏造などありますので、苦手な方は回避してください。話としては、前に書いた「迷子の犬を見つけたら」、その次の「また明日」のあとになります。

青く結晶化した彼女が、氷のように微塵に砕け散る夢。アルマは飛び起き、そしてベッドから転がり落ちた。

もう朝。

「いっ、つー……」

ぶつけた頭を、わしゃわしゃとかきむしる。安物のパイプベッドが、妙にかしいでいると思ったら、スチール製の足が一本、見事にへしゃげていた。

「あーあ……」

また壊した。いや、さすがにベッドまで壊したのは初めてか？己の粗忽さ、というか図体が恨めしい。

結露で覆われた窓ガラスが、弱い日差しを受けて輝く。外は真っ白な霜だ。

「何なんだよ、もう……」

嫌な夢を見た。

あまり覚えていないのだが、最近、似たような夢を良く見る気がする。うなされて目が覚めると、いつも全身に冷や汗。どうせ想い人の夢を見るなら、もっとこう、優しい設定が欲しい。

今日はクリスマスイブ。世間一般で言えば、祝福された一日の始まりだ。現役高校生である彼にも、それなりの予定がある。

藍羽邸で一日格闘特訓。

「アオイがね、背が伸びてるんですよ」

暖かいサンルームでお茶をしながら、ルリが口を尖らせる。

お嬢様の今日の装いは、ファーつきの、シンプルな黒の膝丈ドレス。アクセサリーは真珠。たぶん、全部本物。

華奢な白い手に、お気に入りの花模様のカップが似合う。湯気の立つ琥珀色の液体の香気と、温室を彩る花の匂い。アンティークな

猫足テーブルの上には、宝石箱をひっくり返したような、美しいデザートの一群。
「成長期なんじゃない？」
砂糖抜き、ミルクはたっぷりと入れて、彼は二杯目の紅茶を啜る。最近では、多少の味の違いくらいは、分かるようになった。今日はセイロンだとか、ダージリンだとか。
「ええ、でもこの三ヶ月だけで五センチ以上伸びたの。私が十二歳の頃より、あんなに高いなんて変です。双子なのに」
「リミッターが外れたせいかも」
そう言ったのは、自分自身の経験による。少なくともペンダントを失う十四歳頃まで、彼の身長は、決して低くは無かったとはいえ、常識の範囲内に収まっていた。
「その割には、私はあんまり、伸びてないんですけど……」
憂鬱そうに溜息をつく。どうやら、自分の身長の低さを、かなり気にしているらしい。
「将来、アオイは私より、ずっと背が高くなるかもしれません。父も母も、小柄なほうでは無かったんですもの」
話題の中心である彼女の姉、藍羽アオイは、鏡を連れて外出中。中等部に転入して三ヶ月。すでに大勢の友達を作り、複数の習い事を復活させ、忙しい子供時代を満喫している様子だ。
「大丈夫。藍羽さんが低いぶん、俺が高いから」
小さいのも可愛いし。と思いながら笑いかけると、ルリはちょっと赤くなって、ぷうっと頬を膨らませた。
「もう。何ですかそれ。フォローになってないです」
「ごめん」
謝りながらも、つい、くすくす笑ってしまう。
平和だ。
三十分の休憩時間。それが終われば、藍羽邸の猛者たちによる訓練が、情け容赦も無くまた続く。それでも、だいぶ身体が慣れた今では、途中でへたばることは無い。

それに、ルリは自分の都合を、彼に合わせてくれる。昼過ぎまでは出かけていたが、お茶の前には戻ってきた。
幾つかのお邪魔因子さえ入らなければ、それなりに、満足度の高いひとときだ。
とはいえ、言うまでも無く、藍羽邸にクリスマスの雰囲気は皆無。
この家では、イブは命日なのだ。ルリとアオイの両親。執事の鑑誠の父親。それに大勢の使用人たちの。
五年前のクリスマスイブの夕方、藍羽家の別荘で、彼らは悪石に惨殺された。アオイは結晶化し、この秋、やっと自由を取り戻したばかりだ。午前中の姉妹の外出は、墓参のためのもの。アオイはそのあと、鏡ら数人の使用人と共に、別荘の跡地に向かった。
ルリは同行しなかった。
理由は聞いていない。あえて話したいことではないのだろう。そして、訓練を口実に、彼を邸に招いた。鬼コーチである鏡抜きなら、トレーニングは、結局、少々ハードな娯楽に近い。
凄惨な思い出のある日だからこそ？
一人になりたくなかったのだろうか。自分に会いたかったからだ、とまでは、さすがの彼も自惚れていない。明るさを装うルリの横顔からは、内面を読み取ることは出来なかった。
そのとき。
「……！」
唐突に、彼の感覚に、ざらつくような違和感が入った。悪石の気配。さほど強くは無い。これなら。
ルリがはっとして、紅茶茶碗を置く。
「お嬢様、」お仕着せの少女が、きりっとした顔で報告に来る。「敷地内で悪石反応を確認しました。各員、緊急配備……」
「あ、いいよ。俺が行く」
彼はもう立ち上がって、テラスに下りる扉の前で、ルリを振り返った。「藍羽さんはここにいて。サンドイッチ、置いといてくれる？　そんなにかからないから」

内側の感覚に従って走り出すと、綺麗に刈り込まれた庭園を、不気味にうごめく異形の物体。大きさは一メートル半ほど。敏捷な動き。蛇や蜥蜴に似ているが、生き物とは呼べない。
身体が勝手に反応する。髪や瞳の色が変わり、瘴気が立ち昇るのが分かる。藍羽邸の狙撃部隊が展開を始めている。
「こっちに追い込んで」
手を振って合図する。
「かしこまりました」
さすがの飲み込みの速さ。しかし、いくら主人の客だといっても、そこまで礼儀正しくしてもらう理由は無いと思うのだが。
飛び掛ってきた悪石の頭部を、見切って拳で粉砕した。
怪物は完全にコアを砕かれ、もうピクリともしない。
ミッション終了。
「凄いですね。変身もせずに、素手で一撃だなんて。手は大丈夫ですか」
顔なじみの戦闘員が、呆れ顔で近づく。お世辞でも何でもない、畏怖に似た表情だ。
「平気。特訓のお陰かな」
握った拳を開き、ひらひらと振ってみせる。何とも無いことを示して、アルマは首をすくめた。楽勝。確かにこの頃、またパワーが上がったようだ。
「悪いけど、あとはよろしく」
「かしこまりました」
後片付けがあるだろうから、訓練再開はたぶん延期。もう暫く、お茶の時間を楽しめる。
そう思いながらサンルームに戻ると、待っていたルリが、心配そうに駆け寄ってきた。顔色が悪い。
「アルマさん」
「終わったよ」
報告すると、ほっとした様子で、表情を和らげる。

「そうですか。良かっ……」
ふらりと倒れた。
「藍羽さん！」
とっさに抱きとめるが、ルリは返事をしない。身体は冷たく、苦しそうな息遣い。胸を押さえ、額に汗を滲ませている。度を失って揺すぶると、喘ぐような微かな声。
「離れて、アルマさん。危ない……」
「え？」
パキン。氷が割れるような、金属同士が触れ合うような高い音。善石の防衛反応。彼女の身体から、彼の腕がはじかれる。
「痛っ」
火傷にも似た痛みより、目の前の現象に衝撃を受けて、アルマは自分を拒絶する青い障壁を見つめる。
見たことはある。以前、彼女が結晶化したときと似ている。だが、あの時とは、全く状況が違うはずだ。
垣根のように、二人の間を隔てている結晶は、彼らが離れた途端に気化をはじめて、やがて跡形もなく霧散した。
「なんで……？」
訳がわからなくて、ルリを見下ろす。膝が立たず、崩折れるようにへたりこんだ、小柄な少女。彼が守るべき、その対象だ。
「やだ……、どうして」
床に手をつき、ルリが蒼白な面を上げた。彼自身と同じくらい途方に暮れ、呆然と、こちらを見つめている。
「ちが……、違うんです、私……、そんなつもりじゃ」
事実。彼女は彼を前にして、障壁を張ったのだ。
「藍羽さん？」
「ごめんなさい。あの、お怪我は……」
ふらつく足で、それでも必死に立ち上がり、ルリが彼に手を差し伸べた。慌てて、彼も彼女を支えようとする。
だが、二人の手が触れる直前、ルリはぴくりと動きを止めた。苦

痛をこらえる表情。顔がゆがむ。信じられないものを見るように、自分の手を見据える。
「そんな……」
瞳が色を変え、再び輝く。そこに現れ、見る間に築き上げられる、二度目の青い障壁。彼からその身を庇うように。
「……え？」
「どうしよう、私……、」怯えた顔で、ルリが両手で口を押さえた。押し殺した悲鳴。「嫌。こんなの嫌です……！」

メイド姿の少女たちが駆けつけて、ルリをベッドに運んでくれた。ルリはそのまま、気を失うようにして、眠ってしまったらしい。
悪い夢を見てるみたいな、クリスマスイブ。
所在の無いアルマは、誰もいない応接間で、鬼瓦を相手に、起きた出来事を説明した。頼りになりそうなアオイも、そうでもない鏡も留守。今日はもう帰りそうに無い。
「どうやら、アレルギー反応らしいオニ」
八百才の知恵者は、目玉をぎょろぎょろと動かして答えた。
「なんで今更……」
納得がいかない。
「原因はまあ、いくつか考えられるオニ。ひとつは、おまえが悪石として、強くなりすぎたことオニ」
無生物の粘土の癖に、鬼瓦は表情が豊かだ。
「暴走なんかしてないぞ」
仏頂面でアルマが答える。
「そういうのとは、また別の話オニ。おまえは増長しすぎオニ。わしも前から、薄々とは気にはなっていたオニが……。アルマ、ちょっとわしを持って外に出るオニ」
「なんだよ一体」
ぶつくさ言いながらも、根が素直な彼は、言われたとおり、鬼瓦を運んでいく。

指示された場所は、何も無い裏庭の一画。
鬼瓦は切り株の上に自分を置き、アルマには少し離れた開けた場所に立つように言った。
「ここならまあ、そんな面倒には……、さてと、目を閉じて、わしの言うことを、しっかり想像するオニ？」
「ん？」
アルマは、ふくれっつらのまま目を閉じる。すると鬼瓦が、平常より五割増下品な口調で喋りだした。
「鍵のかかった理事長室で、ルリと鏡が二人きりオニ」
「は？」
「黙って聞くオニ。鏡がルリに近づいて、ぎゅーっと手を握るオニ。それから熱く囁くオニ。お嬢様、私は前からあなたのことが……」
ドゴン！
と大きな地響きがして、アルマの足元、半径一メートルの範囲で地面がえぐれた。だが彼はそんなことには頓着せず、真っ赤になって鬼瓦にくってかかる。
「てめえ、何を言い出しやがる！」
逆上の余り、若干台詞のキャラが違っている。
「やれやれ反応早すぎオニ、まだこれからが良い所オニ……、そしてルリはうっとりと鏡を見つめ」
ズガン！
今度は彼が手をついた切り株が、粉々に砕け散った。放り出された鬼瓦が、逆さまに芝生に転がる。
「男の嫉妬は醜いオニ……」
「だから！　何が言いたいんだ！」
「最近、気がついたら物が壊れたり、砕けたりしていた覚えは無いオニ？　例の一件以来、おまえは無自覚で悪石の力を発動させるようになってて、しかもどんどん強くなってるオニ」
アルマは自分の右手を見た。
今日も。野良悪石を一匹、苦もなく退治したばかり。

「確かに、力は強くなってる気がしてたけど」
鬼瓦が誘導した、今の二つの超常現象では、アルマの外見には、全く変化はなかった。
数ヶ月前の事件で、彼は自分の本来の力を引き出すことに成功した。基本は悪石だが、自分の意思で力を操作できる、という点では善石の要素も備える。稀有なケースらしい。
そのことに安心していたのか。
にしても。
「理性では片付かない事柄もあるオニ。いつの時代も、若い男女が色恋沙汰に溺れる姿は哀れオニ。おまえはルリに惚れてるせいで、ルリの前では力がだだ漏れ状態オニ」
「それって、……」
かなり情けなくないか。
「でも、藍羽さんは善石だろ。悪石には反応しないはずだ」
「結界を張れるのは、ルリが力を発動できるようになった証拠オニ。浄化していないセイクリッドセブンの原石を取り込んでから、ルリはたぶん、純粋な善石ではなくなったオニ」
「つまり？」
「フェイの件を覚えてるオニ？　浄化していない石を取り込めば、善石だって暴走するし、それが原石なら、危険も増すオニ。ルリだって、自分の異変に気づいてた筈オニ。でもって、強くなりすぎたおまえの悪石の力に触れて、拒絶反応を起こしたオニ」
あるのか、そんなこと。
理不尽な世界の出来事の話は、いつまでも理不尽なまま、整理は付かない。
だけど一番重要なことは。
「……治るのか」
アルマの問いに、鬼瓦は答えなかった。
高台に位置する藍羽邸のベランダからは、きらきらした海辺の町

の夜景が見える。海から月が昇るのを、ぼんやりと眺めていたアルマの背後で、軽い足音がした。
「アルマさん」
澄んだ声だ。いっそ明るいくらいの。
「こちらにいらしたんですね」
「寝てないでいいの？」
「もう大丈夫です。ご心配をおかけしました」
にこっと微笑む。その笑顔が、いつもより、一層儚い。
「昼間のこと、本当に申し訳ありません。取り乱して、みっともないところをお見せしてしまって。折角いらして頂いたのに、アルマさんには、またご迷惑を……」
ふっと口調が揺れ、だがすぐに持ち直す。
「でも、もう平気ですから。こんな時間まで、待っててくださって、どうも有難うございました。それで、あの、これ」
抱いていた包みを、彼に渡す。リボンをかけ、綺麗にラッピングしたマフラー。カードはついていない。
差し出した彼女は、淡色の、革の手袋をはめていた。
「完成させました。今更、こんなの嫌だとおっしゃっても駄目ですよ。受け取ってくださるって約束、しましたよね」
「……ありがとう」
アルマは彼女に触れないように、注意深く包みを取る。
「開けていい？」
「どうぞ。良かったら、そのまま使ってください。ここ、寒いですもの」
「うん、じゃあ遠慮なく」
リボンを取り、ラッピングを剥がす。手袋をはめたまま、ルリはそれを回収する。小さく畳んで、ポケットに入れた。
「藍羽さん、それ」
アルマの視線に、ルリは得意げに手を出して見せた。
「いいアイデアでしょう？　母が、ペンダントに触れるとき、いつ

も手袋をしていたのを思い出して。これでもう、いつでもアルマさんと、手を繋げちゃったり、とか……」
沈黙が落ちた。
「あ、あの、昼間はアルマさん、悪石退治の直後だったから。それでだと思うんです。今はもう、全然ほんと平気です。ずっと楽になってて……、」
「藍羽さん、今日は嘘が下手だ」アルマはちょっと笑った。「最初の頃、悪石に感化されると、俺は転げまわるほど苦しかった。あのときの悪石より、俺はずっと、強いんだよ？」
いいえ、とルリはぶんぶん首を振る。
「いいえ、あんな怪物と、アルマさんは違います。アルマさんは……」
必死な顔で、不意に言葉をとぎらせ、ルリはうつむいた。
「ごめんなさい」
「なぜ謝るの？」
「あなたを、傷つけてしまったから」
小さく、細く、華奢な身体。
彼はマフラーを肩に巻きつけてから、一方の端を、ルリに向かって差し出した。「はい」
「え？」
「ほら。長いから、二人で巻ける」
「え、あ、あの。でも」
「寒いし」
「そ、そうですね……」
わたわたしながら、ルリが、遠慮がちにはじっこを首に一巻きするのを、彼は眺める。
いつもと変わらないように見える。優しくて、礼儀正しくて、いい子だ。気丈なふりをして、いつでも笑顔を作ってみせる。
毛糸で繋がる二人の間に、半人分だけ、間隔が空く。
「えっと……」

アルマの視線から逃れるため、ベランダの手すりから、ルリは空を眺める。
「綺麗な月ですねえ」
「そうだね」
頷くアルマに、ルリが小さな溜息をこぼす。
「ごめんなさい、こんなイブで。私には、この日はいつも厄日みたいです。昔はこうじゃなかったはずだけど……、楽しかったクリスマスの思い出なんて、もう、とっくに忘れちゃいました」
「俺は覚えてる」
とアルマは言った。
「小学校の頃。毎年、イブの夜には、施設のみんなで、バスに乗って出かけるんだ。雲まで届きそうな、高いビルのてっぺん。お伽の国みたいなイルミネーションを見に行く。ご馳走があって、いろんなショーを見せてもらって。ぐっすり眠り込んだら、次の朝、ツリーの下はプレゼントの山」
ふふっ、と笑う。
「あれは、君が家族と昔住んでた、ペントハウスだよね。匿名の寄付。施設では、足長サンタで通ってた。五年前だけ、イベントは中止。俺は翌年、別の施設に移ったから、その後は知らないけど。今年もまだ、子供たちは来てる？」
大きな目を見張って、ルリはアルマを見上げ、そして頷く。
「……ええ。楽しみにしてくれるそうなので。飾りつけは、業者の方にお任せしていますが……」
大富豪の藍羽家にとっては、身寄りのない子供たちのサンタになるくらい、ただの、なんでもない慈善事業。
そう言われてしまえば、確かにその通りだが。
「何にも知らなかったけど。俺たちはみんな、幸せな気分になれた。君のご両親のアイデア？」
「あの園には、父の古い知人が、働いておられて」
「それで俺も？」

尋ねると、ルリは微かに息を飲み、そして頷いた。
「アルマさんのお母さんは、学生時代の母の先輩で。二人はとても仲が良くて、セイクリッドセブンに触れたのも同じ場所でした。でも、アルマさんたちは、たびたび転居されていたので、亡くなられたことを知ったのは、随分遅くなってからで。母は、アルマさんを探して、引き取ろうとしたそうです。でも、父が……」
軽く息を吸い込む。
「私たちが善石で、アルマさんが悪石だから、もし何か起こったら、傷つくのは子供たちだからと。それで、ペンダントを手放さないようにだけ手配して、信頼できる場所にお預けしたのです。アルマさんのお母さんも、アルマさんを研究所に行かせたくないと、考えておられましたから」
「そっか」
アルマは短く頷いた。
「五年前、ご両親の事件が起こったあと、君はなんで、俺に会いに来なかったの？」
「行ったら、ご迷惑になると……、思いました。ショックから、私はなかなか立ち直れなくて……、迷っていて……、そうしたら、橋の事故が」
大勢、傷つけた。
「研見さんに。三年待ちなさいと、言われました。三年の間、アルマさんが悪石の力を使わなければ、信じてもいいだろうと。今になってみると、利用されていたんだと、解りますけど」
「なぜ、話してくれなかったの？」
「……聞かれなかった、ので」
「君はいつも何も言わない。俺は一人で忘れてしまって、何ひとつ知らなくて。気づけなくて」
ごめん、藍羽さん。とアルマは呟いた。
「教えて。今まで、俺がどれだけ君を泣かせて、どれだけ君を傷つけてきたか」

ルリが、驚いたように彼を見る。
「そんなこと！」
嘘つき。
「夏の終わり、海辺で花火をしたのを覚えてる？」
あのとき。なんて自分は馬鹿で、そして幸せだったのだろう。
「はい」
ルリは頷いて、にっこり微笑んだ。「とても楽しかった」
「手をつないで帰った」
差し出した手を、君が取ってくれたとき、抱きしめてキスすれば良かった。そうしようと思えば、いくらでもそう出来たのに。
馬鹿だ。
「小指の意味、いつ知ったの？」
「えっ……」
ルリはちょっと赤くなり、悪戯っぽく微笑んだ。
「お友達、でしょう？」
「嘘つき」
「アルマさんこそ」
二人で笑いあう。この空気が愛しくて。
「ずっと君が好きだった」
そういうと、ルリは、「はい、私も」と笑う。
「俺と付き合ってよ、藍羽さん」
するとルリは。「はい、どこまでも」と笑う。
耐えられない。
「信じないよ。君は嘘つきだから。肝心なことはいつも、何も言ってくれないんだから。どうして笑えるの？　君は今、俺といるのが苦しいのに。震えるほど痛いはずなのに……！」
顔を見られないように、手すりに伏せた。肩にかけたマフラーが、軽く引っ張られる。
「壊したく、ないんだ」
守りたくて。守らせて欲しくて。

それだけを願ってた。
「苦しくなんか、ありませんよ」
労わるように、ルリが言う。そっと、彼の髪に、触れてくれる手がある。柔らかい、上質な革の感触。
「アルマさんが最高級の悪石なら、私だって、最高級の善石なんです。原石の一つ二つ、すぐに、みんな浄化しちゃいます。やれば結構、出来るんです、私。マフラーだって編めるし。悪石退治の財団だって、ちゃんと作れた」
優しい手が。
額に触れ、彼の頬にたどりついて、それを持ち上げる。
「顔を、上げてください。アルマさん。背筋を伸ばして。しっかり前を見るの。忘れないで。お母さんの言葉を」
ふわりと彼を包む、暖かい声。
「あの日。私があなたに会いに来たのは、そんな顔をさせるためじゃなかった。お礼が言いたかった。あなたはいつも、私を助けてくれるから。……だから、笑っていて欲しいんです」
幾つもの、鮮やかな過去のイメージ。
そのどれだけを、共有できているのだろう。
ルリの目が、同じ高さで、正面から彼を見る。
「私は壊れたりしません。いつも、アルマさんの傍にいます。ここにいて、とあなたは言ってくださったから」
視線が絡み、動けなくなる。
「君を抱きしめたい」
呟いたら、小さな声で、「はい」と答えた。
「キスがしたい」
囁いたら、さらに小声で、「はい」と頷く。
手袋の指先が、頬から顎にずれて、唇に触れる。息を止め、ルリはその指先の上に、軽くくちづけた。
「あなたのものです」
流れ込む意思。浄化される記憶の奔流。

一瞬、吐息を感じて。
離れたとき、苦しげにひそめられた眉が見えた。硬くこわばった手と、痛みに微かに震える身体。零れ落ちた涙も。
「もう、みんな貰ってる」
意思も、すべても。受け取ってる。
「君は治るよ。俺が絶対、なんとかする」
「信じます」とルリは微笑んだ。「アルマさんは、私を必ず、助けてくれます。……いつだって」
「きっと」
強く誓って、一緒に月を見上げる。
今夜はクリスマスイブ。祝福された恋人たちの日のはず。
長身の彼と、小柄な彼女が、赤いリボンのような、長いマフラーで結ばれている。二人の間には、半人分、隙間がある。
だけど。
何も、入れさせてやらない。誰も。

冬休み。晴れた一日、鉱石部の校外活動。
（ごめん、母さん）
心の中で謝って、アルマは桟橋から、ペンダントのかけらを海に投げ込んだ。背筋を伸ばして駆け出すと、尋常でない長身は、なんだか麒麟に似て見える。
鉱石部の女の子たちと合流し、停泊中の豪華なクルーザーに乗り込む。デッキの上には、鬼瓦を抱いた藍羽姉妹と、イケメン執事。
挨拶を交わし、彼と彼女は並んで座る。何も、触れ合わない間隔を残して。
「大丈夫？」
彼が尋ねる。
「はい」
彼女が微笑む。

きっと、距離がゼロになる日まで続く、何気ない遣り取り。
質問は、いつも同じ。というか、いくらアルマが、「苦しい？」とか「痛い？」と聞いても、頑固なルリは、常に「いいえ」と言うだけなので。
でも、大丈夫だ。
二人は今日も、並んで座っている。
対になった石ころのように、磨かれた二粒の宝石のように、そこにいるのがとても自然で、とてもお似合い。
潮風に吹かれ、青い空の下で。
気の遠くなるような昔、宇宙のどこかで生まれた星と星が。何かの奇跡で巡り合ったら。
たぶん。
ここにいるのが、そう。

了

（後書き）

アニメのラストシーンの脳内補完が、こんな形になりました。たぶん、ハッピーエンドなんだと思うのですが、……若干の溜息をつかざるを得ません。つくづく、幸せなアルルリを、また見たいものです。書く作業はあっという間で、とても楽しかったです。有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8663y/

ノエル

2011年11月25日23時49分発行